

言葉に潜む死の香り

——小川洋子随想教材を読む

高 木 佐和子

これまで、西田谷ゼミの共同研究として小川洋子教材の検討を続けている。西田谷洋編『女性の語り／語られる女性 日本近現代文学と小川洋子』（一粒書房二〇一五・一二）では「トランジット」・「バックストローク」・「飛行機で眠るのは難しい」・「果汁」・「リンデンバウム通りの双子」・「博士の愛した数式」・「巨人の接待」・「ハキリアリ」、愛知教育大学西田谷洋研究室編『西田谷研究室の歩み・補遺』（一粒書房二〇一六・二）では「缶入ドロップ」・「愛されすぎた白鳥」と、小川洋子の教科書教材のうち小説を取り上げてコンパクトに論じた。今回は高等学校国語科教科書に採用されている小川洋子のエッセイを四編考察する。

エッセイ「誰の目にもふれないところで」では、ひっそりと姿を消しながら仕事をする人を取り上げている。今ここにいないけれども確かに存在していたはずの人々という点で、その存在は死者と通ずるものがある。「人と人が出会おう手順」では亡くなった祖母とオーストラリアで出会ったガイドとを重ね合わ

せている。人と人の偶然の出会いの中に、亡くなった祖母を強く思い出させてくれるような運命と呼びたくなるような出会いが潜んでいることに感動している。「私の愛するノート」ではノートが創作の意欲を増しているのだという。ノートにはすでに亡くなった人物の言葉がメモされ、小川を励まし続ける。言葉は今や存在しない人物と今を生きる私たちを繋ぐツールなのだ。「数の不思議に魅せられて」は『博士の愛した数式』の創作過程が書かれている。数学の永遠性や完全な美しさを讃えると同時に、それと対照的な人間の生をいとおしんでいる。一見、生や死が表面的なテーマとして表れていないように見える作品でも小川の言葉選びにはその要素は潜んでいる。小川洋子が『アンネの日記』の熱心な読者であることは今や広く知られているが、各作品においても『アンネの日記』ないしホロコースト文学の影響が現れている。

小川洋子は現在も精力的に執筆活動を行っており、広く評価されている。海外での評価も高く、国外でも共通して受け入れ

られているのは、人間の永遠のテーマである死について物語っていることが大きいのではないだろうか。今後も小川は生と死について様々に作品を送り出してくれることだろう。

なお、小川洋子教材には、他に高校教材である「アンジェリーナ 君が忘れた靴」、中学校国語教材である「百科事典少女」がある。一九九二年六月に発表され、教材化に際して副題が省略された「アンジェリーナ」は忘れられた靴によっていわば未発する「僕」と持ち主の女性との交流を描く。

「百科事典少女」は二〇二二年六月に発行された『最果てアークード』からの一篇である。この短篇集は有永イネによって漫画化されている。文庫本の帯には「小川洋子が紡ぎ出す、生と死のあわいにある夢の時間」と紹介されているように、この短篇集全体は死の雰囲気と覆われている。その特徴はこの作品に限らず、小川洋子全体の特徴ともいえる。登場人物は出会った人々の死を悼み、亡くなった人々のために、もしくは自分のために生命の記憶を引き継いでいく。小川洋子作品では死は決して忌み嫌われるためのものではない。残された人間が死者の想いを想像しながら生きていくことで、むしろ死者が生きているときよりも深く死者を理解したり、ぽっかり穴の空いてしまった自分の生を慰めたりする。小川洋子作品は死者や今はいなくなってしまうもののへの慈しみの気持ちから始まっているように思われる。